

昭和の暮らしと俳句

宇多喜代子

昭和の暮らしと日本人の心性

兼題 八十八夜



昭和10年、山口県生まれ。「猶林」を経て「草苑」にて桂信子に師事。現在は「草樹」会員。第29回現代俳句協会賞、第35回蛇笏賞、第27回詩歌文学館賞、第14回現代俳句大賞、日本芸術院賞等受賞。句集「らの木」「夏月集」「家」「記憶」「森へ」等。著書多数。

東京都大田区南久が原に登録有形文化財「昭和のくらし博物館」があります。なにに博物館といいますが、この「昭和のくらし博物館」は、当節ではあまり目にするような木造二階建の民家なのです。なにしろ敗戦間なしの昭和二十六年に建てられた家屋ですから、もうすぐ築七十年を迎えます。前年の昭和二十五年にはじまった住宅金融公庫の融資で建てられた家なのですが、敷地六十坪、一階に三部屋、二階に二部屋、台所に便所という当時の俸給生活家庭としては上々の建物であったように思われます。

現館長の小泉和子さんは昭和八年生まれ。小泉家の長女で、生活史研究と家具室内意匠史研究を専門にした工学博士です。自分の育った自宅をそのままのかたちで「博物館」にして、「家を残し、くらしを伝え、思想を育てる」をモットーに昭和庶民の「くらし」や「もの」を残した空間を保持して、ともに「昭和」という近代社会の長い部分を支えた日本人市民の心性を考えてみようという一つの場です。なにしろ、核家族というような言葉など微塵もなかった昭和二十年代の都市生活者一般の住宅事情は、お父さんが「書斎」をもったり、子どもが「子ども部屋」をもったりすることとはかけ離れたものでした。子どもはみんな一緒に一つの蚊帳で寝ていましたし、宿題は食卓の電気の下に頭を寄せ合って兄弟姉妹でやっていました。いまだテレビもなく、ラジオの子供向け番組といえば昭和二十二年に始

まった「鐘の鳴る丘」、その後の「新諸国物語」のみ、誰もが塾へ通うようなこともなく、夜は早々に就寝です。

それにどこのお宅にもいわゆる親戚の人たちがよく出入りしていました。お前さんはすこし煙草の量が多すぎますなどと父にお説教をするのはお父さんの伯母さん、来るときにいつもお土産が楽しみだったのはお母さんの妹、そんなふうには家族以外のいろんな人と接することが多かったのです。到来物があればお隣へおすそ分けです。お移り（お返し）はマッチや半紙でした。

つまり春夏秋冬の寒暖や自然に逆らわない衣食住、小泉館長の言われる「電気に頼らないくらし」だったのです。手作りの年中行事や行事食を季節のイベントとして生きてきた家族の歴史、ひいては日本人の暮らしの歴史の様相をとどめ、暮らしとは何かを考えるヒントを多々呈してくれています。

この家の台所の床下にはいくつかの甕があります。冷蔵庫が普及するまでは、通気をよくした冷暗所である床下は保存食の保存場所としておおいに役立っていました。甕の中身は梅干、らっきょう漬などです。

梅を干す真昼小さな母の音
らっきょうの白きひかりを漬けにけり
三年は囲ふつもりの味噌を搗く

飯田龍太
大石悦子
後藤比奈夫

梅干やらっきょう、味噌などは手作りを季節の目安にし

ていました。家ごとにいささかの違いがあり、それが「わが家の味」になっていたのです。

ここでは野草茶も手作りです。たとえば雑草の代表のようなドクダミ、これを十薬と呼ばれる薬草茶にして時々飲むと利尿作用、動脈硬化の防止になるとのこと。このほか柿の葉、笹など薬効のあるものはお茶にしています。お茶は梅干やらっきょう、味噌などと同じく、保存食品の最たるものです。

わが家では祖母が自家用のお茶を作っていました。わずかな茶を植えた茶山で茶摘みをし、蒸したり炒ったり揉んだりして乾燥させた素朴なお茶です。幼児のころから祖母手製のお茶を飲んでいて、大人とおなじお茶を飲むようになったのは中学生になってからでした。私の茶好きはこの頃からです。今にして、祖母のお茶は香ばしくておいしかったと思うのです。なにしろ、手間隙かけたお茶です。その頃に覚えたことばが「八十八夜」でした。歳時記にある通り、この日を目安に茶の葉の出具合をみて茶摘みをしていたのです。

八十八夜は二月初めの立春から数えて八十八日目。おおよそ五月二日頃にあたります。だいたい三日のちには立夏です。まさしく「夏も近づく八十八夜」であり「野にも山にも若葉が茂る」の好季です。この時期、安心して思うわぬ霜害におそわれることがあったのですが、そろそろそんな霜とお別れだよを「八十八夜の別れ霜」で言い表

し、種蒔きの目安としていました。また「八十八夜の針の丈」ともいいます。これは苗代の稲の丈が縫い針ほどに伸びてきましたという秋の豊作を期待することばです。

熟睡して八十八夜かゞやけり

相馬遷子

こうしてこよみの二十四節気や雑節を暮らしの目安にし
ながら、自然界との連携を図ってきたのです。いったん機
嫌を損ねると雨も風も人力ではどうにもなりません。雨よ、
風よ、悪さをしないでおくれという祈る気持ちが雨乞いや
風鎮めの祈禱を生み、人々の心を繋いでいたのです。

「昭和のくらし博物館」にある家具道具は昭和三十年代
までのもの、小泉館長は「電気に頼らない、買わない、捨
てない、始末のよいくらし」を昭和という時代の生活の核
だといひ、その暮らしの最後が昭和三十年代であったと
言っておられる。同感です。これに加えて「思考は頭、作
業は手、移動は脚」をつづけてきた千幾年かのながき時代
の最後だとも言えそうです。

選者の一句

透明な傘の八十八夜かな

喜代子